



子育て支援ファミリー・コンサート

11月4日(金) 11時～11時半(開場10時半)

会場 ● 3階多目的ホール 無料

出演 ● 四国大学吹奏楽部

主催 ● 北島町教育委員会 (☎088・698・9812)

■毎年11月に開催し大好評をいただいている未就学児歓迎のコンサート。時間は約30分。子どもさんが喜ぶような曲を用意しています ■子育て支援の催しです。乳幼児とお母さんお父さん大歓迎!

認知症普及・啓発講演会★講師 藤川幸之助

支える側が支えられるとき

～認知症の母が教えてくれたこと～

11月12日(土) 13時15分～15時15分

会場 ● 3階多目的ホール 入場無料

講師 ● 藤川幸之助 (詩人、児童文学作家)

主催 ● 北島町地域包括支援センター

徳島クリエイターズ・マーケット21

11月26日(土) - 27日(日) 10時～17時

会場 ● 2階ギャラリー *最終日は16時迄

主催 ● 徳島クリエイターズ・マーケット事務局 (川久保 ☎080・4034・1090)

■凄腕の「モノ作り人」達が集うマーケット。本町在住のハンドメイド作家・川久保貴美子さんが呼びかけて実現。川久保さんは、新聞・テレビ・ラジオ等で話題沸騰の脱力系癒しキャラ《ししゃもねこ》を造形した作家です。ご注目を。

2016年度北島町人権週間行事

阿波市市民劇団「千の舞座」公演

人権劇 千の舞～ふるさとへ帰りたい～

11月30日(水) 14時～

会場 ● 3階多目的ホール 入場無料

出演 ● 阿波市市民劇団《千の舞座》

作品 ● 人権劇「千の舞～ふるさとへ帰りたい～」(原作十川昭夫(そがわあきお)、脚本小阿弥義晴)

主催 ● 北島町、北島町教育委員会、北島町人権教育推進協議会(問 ● 町教委事務局 ☎088・698・9812)

■千の舞座は徳島県ハンセン病支援協会の会員有志25名が、2008年1月に結成したボランティア劇団。座長は十川昭夫氏。北島町には3度目の登場。

北島トラディショナル・ナイトVOL.20

ケルトの歌、やすらぎの調べ

マスカース・コンサート

11月22日(火) 19時～

会場 ● 3階多目的ホール

入場料 ● 前売/大学・一般2000円、小・中・高1500円(当日各500円増)

出演 ● マスカース【高野陽子(歌、パウロン) + kumi(アイリッシュ・ハーブ) + 吉田文夫(ポタン・アコーディオン、コンサーティーナ) + 笠村温子(アイリッシュ・フィドル) + 原口トヨアキ(ノーサンブリアン・スモールパイプほか)】

主催 ● 北島トラディショナル・ナイト実行委員会 (☎088・698・1100)

共催 ● 北島町立図書館・創世ホール、徳島県民文化祭開催委員会

後援 ● アイルランド大使館、徳島新聞社、朝日新聞徳島総局、四国放送ほか

■1997年にスタートし、ついに20回を迎える《北島トラディショナル・ナイト》。今年は、関西屈指の美声歌姫・高野陽子率いる《マスカース》が満を持して登場■アイルランドには「フォギー・デュー(the foggy dew=霧のしずく)」という美しい楽曲があります■この歌は、アイルランド独立の契機の一つとなった《イースター蜂起》の死者を悼む鎮魂の作品です■その音楽は、ただ切なく美しいだけではなく、重たく深いものを誇り高く背負っているから、力が宿っているのだと思います■北島町では、ささやかな連帯の気持ちを込めて毎年この曲を、出演者に演奏していただきました■2016年は、その《イースター蜂起》からちょうど百年目にあたります■徳島県北島町のステージで、美声ヴォーカリスト・高野陽子が、切々と「フォギー・デュー」を歌いあげます■その歌声は、きっと海の彼方のアイルランドの人たちの魂に届くであろうことを、私たちは信じてやみません■乞う、ご高評!多数ご参集下さい



北島アンダーグラウンド・ライブ

遠藤ミチロウ★福島復興祈願 北島公演

新作映画【SHIDAMYOJIN しみょうじん】上映+ライブ

12月17日(土) 18時半～

会場 ● 2階ハイビジョン・シアター

入場料 ● 前売/3000円(当日3500円)

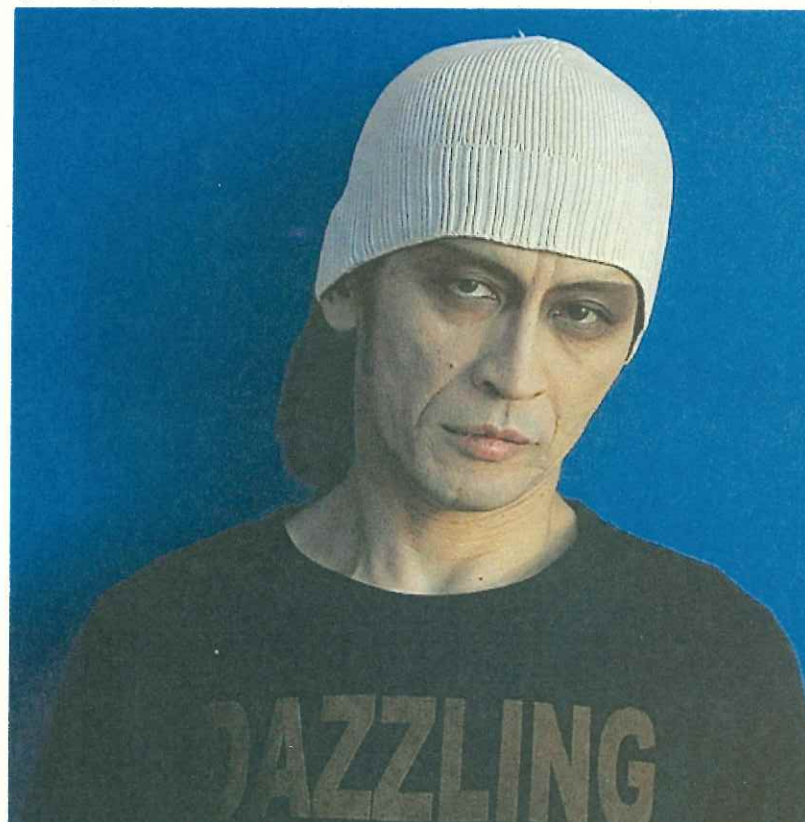
出演 ● 遠藤ミチロウ

主催 ● 遠藤ミチロウ★ライブ実行委員会 (☎088・698・1100)

内容 ▼ 新作映画「SHIDAMYOJIN(しみょうじん)」(遠藤ミチロウ&小沢和史監督作品、2016年、64分)上映+遠藤ミチロウ・ライブ(90分)

主催 ● 遠藤ミチロウ★ライブ実行委員会 (小西 ☎088・698・2946)

■遠藤ミチロウ、通算9度目の北島町登場■映画は、遠藤氏が民謡バンドを率いて福島の被災地・いわき市志田名(しみょう)地区で三十年以上途絶えていた盆踊りを地域のお年寄りたちと共に復活・成功させ、さらに祭りから祭りへと駆け抜ける姿を描いたドキュメンタリー作品■映画上映の後、本人生出演でライブを行なう■福島県二本松市出身の遠藤氏は、3・11大震災後、和合亮一氏や大友良英氏や坂本龍一氏たちと《プロジェクト・フクシマ》を発足させ、被災地支援に力を注ぐ■2014年、膠原病発症。入院治療を経て、薬の投与を受けつつライブ活動再開。2015年4月、CD「FUKUSHIMA」、著書『膠原病院』発表。同年12月には自身の2つのバンド、羊歯明神とTHE ENDのCDを同時発売するなど、不屈の闘志で甦ったその雄姿は感動を与え続けている。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

北島トラディショナル・ナイト

20 回 の 足 跡 ■ 小西昌幸

■11月22日(火)に、20回目の北島トラディショナル・ナイトを開催します。今年、関西のグループ《マスカーズ》による「ケルトの歌、やすらぎの調べ」をお届けします(22日〔火〕19時～、創世ホール)。今年、当館のケルト～アイルランド音楽探究演奏会シリーズである《北島トラディショナル・ナイト》がスタートして20回目の大きな節目を迎えます。この機会に、その足跡を振り返ってみたいと思います。

【北島トラディショナル・ナイト】

- 第1回●1997年11月14日◎シ・フォーク「アイルランド音楽の夕べ」
*吉田文夫+赤沢淳(あつし)+原口トヨアキ
- 第2回●1998年11月6日◎ディンクルズ・ヴェー「アイリッシュ・ハーブの世界」
*坂上真清(さかうま) + 吉田文夫 + 赤沢淳(あつし)
- 第3回●1999年11月21日◎ハード・トゥ・ファインド「北の調べ、ケルトの息吹き」
- 第4回●2000年11月4日◎カロランズ・カフェ「アイリッシュ・コンサート」
- 第5回●2001年11月24日◎グレイグース「アイルランド音楽の世界」
*羽ノ浦町(当時)の外国語指導助手ショーナ・マッカーノン女史(北アイルランド出身)が3曲でアイリッシュ・ダンス共演
- 第6回●2002年10月13日◎セタンタ「郷愁のアイルランド音楽」
- 第7回●2003年9月17日◎ザ・リフィ・バンクス・トリオ「アイルランド音楽への招待」
*サポート赤沢淳
- 第8回●2004年11月25日◎ジャッキー・デリー+守安功+守安雅子+北村剛「アイルランドの風」
- 第9回●2005年11月12日◎近世雑楽団エストラダ「リバーダンス・ミュージック」
- 第10回●2006年10月29日◎シ・フォーク「アイルランド音楽の午後」
*吉田文夫+赤沢淳+原口トヨアキ+山本篤+山本晴美
- 第11回●2007年9月15日◎シャナヒー「ケルト、麗しの調べ」
- 第12回●2008年11月23日◎ハード・トゥ・ファインド「郷愁のケルト、北国の調べ」
- 第13回●2009年10月16日◎K A A Z (カーズ)「ケルト音楽の夕べ～バグパイプとフィドルの響き」
- 第14回●2010年10月17日◎ハンドリオン「アイリッシュ・ハーブの宇宙」
- 第15回●2011年11月27日◎マックフィドルズ(+吉田文夫)「晩秋のケルト」
- 第16回●2012年10月23日◎ドレックスリップ「北欧・ケルトの世界」
- 第17回●2013年11月15日◎デイル・ラス&トム・クリーガン(+ジェイ・グレッグ)「躍動するアイリッシュ音楽」
- 第18回●2014年11月9日◎マレカ&ジュンジ「アイルランド・魅惑の調べ」
- 第19回●2015年11月1日◎鞆(ふいご)座、ココペリーナ、ディンクルズ・ヴェー(創世メモリアル坂上真清ユニット)、吉田文夫「ケルトシットルケ・オールスターズ てんこ盛りアイリッシュ音楽」

第20回●2016年11月22日(火)◎マスカーズ「ケルトの歌、やすらぎの調べ」(今回)*高野陽子+kumi+吉田文夫+笠村温子+原口トヨアキ

■当シリーズは、町予算なしの事業としてスタートし今日に至っています。具体的には、チケットの売り上げ分、出演者のギャラ+諸経費(交通費、宿泊費)、施設側諸経費(音響、受付バイト代等)等を賄うという方法です。

■創世ホールでは開館当初から文化事業予算としてコンサート開催の委託料、映画上映会用のフィルム借り上げ料、講演会講師謝礼などが予算計上されていましたが、今では講演会講師謝礼しか残っていません。緊縮財政で、ありとあらゆる自治体の文化予算がどんどん削られてゆくという状況が否応なしにあり、当館も例外ではなかったわけです。詳細は省きますが、そういう背景があって、あえて予算計上しない方法の催しを選択したのだということをご理解ください。

■もちろん苦労は大変多いわけですが、予算なしの行事なら行政の事情に振り回されることなく続けられるのですから、今となっては「この方がよかった」と(逆説的ですが)開き直っています。

■私は、系統立ててアイルランドやケルト文化圏の音楽をきちんと聞きこんできたわけではありませんが、音楽的感受性と自我が芽生え、自分なりに好みの音楽を探求し始めたのは1970年代半ば以降(10代後半)だったと思います。英国のロック音楽が好きで、陰りがある、くすんだ色合い、異端的雰囲気などを好む傾向がありました。ジェスロ・タルには英国伝統音楽の要素があり、ロッド・スチュアートも初期アルバムには必ず伝統音楽的な色合いの楽曲が1つは入っていました(レッド・ツェッペリンにサンディ・デニーが、ピンク・フロイドにロイ・ハーパーが、それぞれアルバム・ゲストとして登場したり、キング・クリムゾンの未発表初期音源にジュディ・ダイブルが参加していたというような、超大物バンドとフォーク系歌手の普通の交流といったことについては、過去に言及したことがあるので省略)。まだまだ明確にケルト文化圏の音楽というものに自覚的ではなかったのですが、多分昔からそちらの方向に自然に引き寄せられていたのだと思います。一方、古楽(中世・ルネサンス期の欧州音楽)の最初の一撃はダンスリー・ルネサンス合奏団でした。坂本龍一とダンスリーのアルバムが実に新鮮で、心を奪われました。古楽まで来たら、アイリッシュに傾倒するのは時間の問題だったと、今にして思います(このジャンルは隣接領域)。

■明確に、意識的に、当分野の探求を決意したのは、1990年代以降だったと思います。90年前後に関西パンク史家として有名な西村明氏(滋賀県近江八幡市、元スーパー・ミルク)と知り合い、フェアポート・コンヴェンションや、ジェスロ・タルのボックス・セットを教えられます。そして、彼の教示でシ・フォークという関西の人たちが自主制作したアイリッシュ系伝承音楽のレコードを知りました。

■もちろん私は勢い込んで、直接シ・フォークの主宰者・吉田文夫さん(宝塚市在住)に電話をかけ、通販注文し、レコードを入手しました。レコード・ジャケットには、もちろんサインを入れていただきました。90年代初めのことです。この時にはまさか北島町に複合文化施設ができて、後に自分がそこに異動して企画者(アート・プロデューサー)人生を送ることになるなどは夢にも思っていませんでしたし、そのシ・フォークが発火点となって、アイリッシュ・シリーズが20回続くことなど、とてもとても予想だにしませんでした。大げさに言えば、運命というのは面白いものです。

■創世ホールでは、開館初年度の1995年2月から《北島クラシカル・エレガンス》という古楽演奏会シリーズを始め、タブラトウーラ+波多野睦美

(2回)、ダンスリー・ルネサンス合奏団(2回)、佐野健二&平井満美子(2回)、カテリーナ古楽合奏団、コンセエル・ノヴァを招きました。

■そして1997年秋から《北島トラディショナル・ナイト》を始めました。その記念すべき第1回が吉田文夫さん率いるシ・フォークだったわけです。

■その頃には、英国ロックを入り口とした伝承音楽系の個人的探究音楽もフェアポート・コンヴェンションからの派生で、スティーライ・スパン、サンディ・デニー、アシュレイ・ハッチングス、マーティン・カーシー、アルビオン・バンド、ボーグスなどの個人やグループにどんどん広がってゆきます(要するにフェアポート関係者のアルバムやメンバーが関わったグループのアルバムが膨大にあり、そこを追ってゆくとだけで勉強ができるという構造)。

■《北島トラディショナル・ナイト》はスタートが無謀でしたから、強力な理解者や仲間(友人・知人)が絶対に不可欠でした。当時の直属の上司・小山建夫さんの後ろ盾、徳島ギター協会の川竹道夫さんの応援があって初めて実現できたといえます。お二人からのご支援(ご家族含む)は、今もずっと欠かさずいただいております。私にとって足を向けて眠れない存在です。

■初期の頃、川竹さんとよく話し合ったのは、いつかこのシリーズを続けていたら、そのうち何かのはずみでアイルランド本国の人が登場することもあるかも知れない、そうならば楽しいだろうなあ、ということでした。そのときは20年続けたら、本国の人の登場もあるかも知れないと何となく思っていました。それは予想よりも早く、7回目のザ・リフィ・バンクス・トリオで実現しました。

■海外アーティストの登場は、3年連続で実現しました。6回目のセタンタ(米国から3人)、7回目のザ・リフィ・バンクス・トリオ、8回目のジャッキー・デリー(アイルランド)と続いたのです。その後は、国内在住の英国出身者や米国出身者を含むマックフィドルズ(第15回)、米国シアトルのデイル・ラス&トム・クリーガン(第17回)が挙げられます。また、アイリッシュ・ダンス共演も第5回で実現しています(当時羽ノ浦町の外国語指導助手として滞在していたショーナ・マッカーノンさん、北アイルランドご出身)。ハード・シューズで舞台が傷つかないように、小松島の田口バリエスタジオさんから、リノリウム板をお借りして、その重さに難渋したことを覚えています。

■ごく初期の頃から私は、歴代出演者に創世ホールでの「フォギー・デュー」演奏をお願いしてきました。おかげさまで、北島町では様々なアレンジで、多彩な「フォギー・デュー」が体験できています。また、日本屈指のアイリッシュ・ハーブ奏者坂上真清(さかうま)氏は、北島町のこの取り組みをずいぶん気に入って下さって、「ノース・アイル・タウン(北の島の町)」という、それはそれは美しい軽快な楽曲を作ってくださいました。ネット検索で【ユーチューブ ハンドリオン ノース・アイル・タウン】と打ち込んで調べてみてください。その美しい音楽に触れることができるはず(右側のとんがり帽子の演奏家が作曲者の坂上氏)。また、同曲はCDにもなっています。アルバム「ケルトシットルケ」VOL.3の3曲目に収録されています(発売元グレン・ミュージック、販売元ビートショップ)。このアルバムはアマゾンで入手できると思いますので、興味を持った人はご探究ください。11月22日の会場ロビーでも買えると思います。

■思い出やこぼれ話はいくらでも湧いてきて、收拾がつきません。いずれにせよ、続けることの大切さを痛感しています。どうか皆さん、第20回北島トラディショナル・ナイト「ケルトの歌、やすらぎの調べ～マスカーズ・コンサート」にご注目ください。(文責=小西昌幸 2016年11月08日脱稿)